

2010.7.31

No.162

編集 樋口 みな子

E-mail [minginga@agate.plala.or.jp](mailto:minginga@agate.plala.or.jp)  
<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>  
郵便振替「銀河通信」  
02740-7-56535  
(郵送6号分1,000円)



## 登って、読んで、観て、綴った!

### 『銀河通信』が22周年に



7.25ペンケヌーシ岳  
のお花畑で

すっきりしない天候が続きますが、皆さまはお変わりないですか? 展望の山には巡り会えなかったですが、雪解けが遅かった分、7月末まで見頃の花々を楽しむことが出来ました。

1988年7月に家族新聞として創刊した「銀河通信」が22周年を迎えました。その頃は版下用紙に手書きして、読者にはコピーして送っていました。当時は日々の生活で精一杯で山とは無縁でした。その頃の通信を開くと、仕事と子育てで奮闘しながら、深夜、台所のテーブルで小さな升目以下手くそな字で書いていた私の姿が浮かび上がってきます。毎月書いていたのも驚きです。若かったのですね。100号を機に家族新聞から個人通信に変更しました。その頃から登山を始めたのです。現在、読者は230人ぐらい。印刷した通信を読む読者が150人にインターネットで読む読者が80人ぐらいです。インターネットでも読めるのに印刷した通信で読みたいという読者も多いです。さまざまな市民運動を伝える通信は印刷したものが読みやすいですね。私自身、2つの山岳会の他に日本自然保護協会、北海道自然保護協会、ユウパニコザクラの会、山のトイレを考える会、雪崩研究会、人権や福祉に関する市民の会等の年会費を納めています。市民運動にはなかなか関係ありませんが会費で応援したいとの思いが強くなります。銀河通信の読者には市民運動の仲間も多く、大変なのは十分に理解していますが、郵送を希望する方は、どうぞ年間1000円の負担をお願い致します。今は印刷を知り合いにお願いしていますが、郵送希望者が50人ぐらいになったら、コピーに切り替えたいと思っています。

山仲間の読者が増えて、昔の手書き通信を知らない人が多くなりました。別の紙面に当時を偲ぶ通信も掲載しました。

7月23日は私の誕生日でした。息子と夫がお小遣いを出し合って、素敵なスニーカーをプレゼントしてくれました。この靴を履いてウォーキングに励み、元気に山登りしたいと思います。また以前、読者から花ギフト券を頂いていたのを思い出し、バラの花束を自分のために買いました。

7月4日に山仲間のTさんが心筋梗塞で急死しました。62歳でした。Tさんとは2年間、某登山教室のサポーターとして一緒に山に登っていました。控えめな方でしたが、いつも事前に次に登る山の下見登山をして、安全を確認して下さりました。健康そのものだったと聞いています。1週間前に山の店で元気な姿を見たばかりでした。そんな突然の死は、ご家族にとってはどうも受け入れがたい悲しさだだと思えます。遺影には、輝いていた山姿のTさんの笑顔がありました。これからもっと山を楽しみたいと語っていたTさん。残念で悲しいです。Tさんもどんなにか心残りだったでしょう。Tさん、ありがとうございました。心よりご冥福を祈ります。



7.17 美瑛岳周辺で

## 高山植物パトロールの富良野岳は小雨決行!

道の自然保護課との合同のパトロールを7月10日、富良野岳で行いました。

JAC支部からはT内さん、T屋さん、私。上川支庁の山岳環境担当のKさん、地元の監視員、地元山岳会会員の6人です。登山口で、高山植物を守ろうの幟を立て、登山者に啓発のチラシを配付し、登山者を見送ったところで私たちも8時半に出発。ずっと小雨が続きます。一番最初に出発したのは関西からの40人の団体ツアーです。雨でいつもより少なめですが、それでも60人ぐらいの登山者でにぎわっていました。

今年は雪解けが遅く、まだ雪渓が残っていました。雪解けに咲くシユジョウバカマが上ホロ分岐で咲いていました。地元山岳会の方と道のKさんは、ゆるんだロープを直したり、冬の間に落ちた大きな岩をよけたりしながら進みます。こうして登山道は安全に歩けるように

整備されているんだと感心しました。愛らしいシマリスが3度も顔を出してくれて登りのつらさをひととき楽しませてくれました。

私たちは雨がひどければ、途中で下山するつもりでしたが、大雨にならなかったのも頂上まで登りました。肩分岐からはずっと素晴らしいお花畑で感激しました。

エゾノハクサンイチゲの群落。コイワ



7.10 エゾルリソウ



7.10 コイワカガミ

カガミや、エゾツガザクラ、アオノツガザクラ、エゾイソツツジ、エゾコザクラやエゾツツジ、タカネタンポポ、ハクサンチドリ等、赤、白、ピンク、黄色、さまざまな花が饗宴してました。エゾルリソウも丁度いい見頃でした。

帰りは、安政火口に立ち寄り亡くなった4人のお参りをして来ました。一瞬でしたが、上ホロが顔を出してくれました。

## 白井川（右股川）で沢研修

ACSの沢研修で6月20日、早朝5時50分に右股林道の終点から4人で出発。私以外は体力も技術も十分なベテランぞろい。まずは地図読みから始まりました。入渓して驚いたのは水量が多いこと。雪解けが遅かったせいか流れも速く、最大で胸まで浸かった所もありました。水は冷たかったです。

私はへつりで、足を滑らせ川にドボン。幸い、後続のK口さんが、川の中でキャッチしてくれ怪我はなかったのですが、それからの沢歩きは恐くなって慎重になりました。上流も水かさは減らず渡渉はリーダ



6.20 白井川は深くで激流でした



タニウツギ

の腰に掴まり流されないように進みました。いつもならしなくて済む高巻きもかなり多かったです。

二股を左に進み、やがて、余市岳の頂上が見えました。さらに沢は急流になり、11時、820m地点で下山を決めました。ザックには帰りは夏道を下る予定で、登山靴とアイゼンが入っていましたが結局使わず来た沢を下り、林道終点4時でした。初心者にとって10時間の遡行は厳しかったです。

ウドがたくさん。私はウドを採るゆとりはありませんでしたが、一郎さん、K口さんからお裾分けしてもらいました。山の斜面には可憐にカタクリが咲いていました。タニウツギや、サンカヨウ、リュウキンカ、たくさん咲いていました。

ウドは、天ぷらにして美味しく頂きました。重たいのにたくさんザックに入れて来たお二人と、安全に配慮してくれたHリーダーに感謝します。



## 雨で断念、オプタテシケ山

7/17日 5:00札幌発ー10:00望岳台ー16:00美瑛富士避難小屋

7/18日 5:00小屋発ー8:30山道入口着ー13:00札幌着

登山口の望岳台に着いたのが8時半と遅れ、下山を白銀温泉先の山道入り口を予定したため2台の車を移動させてからの10時出発になりました。メンバーは男性6人、女性3人、ACSの山行です。

私は久しぶりの縦走装備で、みんなと歩調を合わせてついていけるか不安がいっぱい。男性陣は二張りのテントに個人装備。私

は食担なので、できるだけ軽くできるような野菜等は刻み、食料は等分に3つに分けました。歩き始めからイワブクロがたくさん。ザックが重いので、ゆっくり進むも、雲ノ平のトラバースはきつい。振り返ると十勝岳が雄大でした。ポンピの沢手前の雪渓は「迅速に」とHリーダーの声が飛ぶ。長いトラバースが終わり、ポンピの沢に向かって下るとイソツツジ、メアカンキンバイ、エゾツガザクラ、エゾコザクラ、チングルマは今が見頃できれいでした。お花畑の斜面いっぱいでした。ミヤマリンドウ、ジムカデも可愛い。また厳しい崖の急斜面。ウラジロナナカマドやウコンウツギの灌木の斜面を登り切ると平坦になり



7.17エゾツガザクラの蜜を吸うコヒオドリ

12:45、重いザックを降ろし昼食としました。

美瑛岳分岐で健脚のK口さん、T原さんの同僚コンビは美瑛岳に。テントを背負ってです。若いT原さんのザックもかなり重そうです。私たちは美瑛富士避難小屋を目指してゆっくり進みました。美瑛岳のコルには3つのザックが置いてあり、しばらくすると美瑛富士から私の知り合いのMさん一行が下りて来ました。時間も15時半になり美瑛富士はあきらめテント場に向かうことになりました。16時、美瑛富士避難小屋に到着。

避難小屋周辺は大にぎわい。すでに8張のテントがあり、仕方なく小屋の隣の水はけの悪い場所にテントを張りました。雨の予想だったので溝を掘って万全。雪渓から水を採るのに往復30分もかかってKさん、Yさんが運んでくれました。1kgの肉を背負ったOさん、ありがとう！おかげで美味しい豚シャブで盛り上がりました。ビールが少し足りないぐらい。20時過ぎにはテントに入り就寝。

深夜から大雨。テントをたたき雨の音と強風で恐かったです。隣の男性陣のテントから雨で浸水するようだったら、避難小屋に移動しようと相談しているのが聞こえます。4時に起床。シュラフ等をザックにまとめ、避難小屋に移動しました。でも小屋を利用している人たちは、場所を譲り合おうともせず、大きな場所を取って寝ていました。Hリーダーが「避難小屋は譲り合って使うものでしょ」と声を掛けるも聞こえぬふり。トムラウシの事故のことは人ごとだったのでしょか？

オプタテシケ山は中止とし、5時下山開始。雨でぬかるみ、岩場も多く緊張を強いられながらも、途中灌木が美しい天然庭園を楽しみ3時間半かかって山道入口に到着。2日間の縦走を終えました。

## 魚がたくさんとれた川ペンケヌーシ岳

山名は沙流川支流のペンケヌーシ川の水源にあることから因ります。アイヌ語で上流の魚がたくさんとれる川と言う意味とあります。

私は平取で生まれ、小さい頃、沙流川で遊びました。今回故郷の山に登りたいとの思いを実現することが出来ました。

7月24日、江別を出るときから雨。日高に着く頃には雨が上がり翌日の山に期待が高まりました。JACの山行でキャンプ場に15人でキャンプ。函館や、帯広からの懐かしい仲間との再会や、地元の夏祭りで楽しいひとときでした。夜の花火大会。夜空を彩る花火の美しさに見とれました。明け方から、激しい雨で、山はほぼ中止かとあきらめていました。数日前に、林道や沢の水量などを確認してきたリーダーのTさんがまずは行ってから中止にするか、登るか決めようということになり4台の車に便乗しあって、20kmの林道を1時間近くかかって最終の駐車地点に到着。途中、落石や風倒木が道路をふさいでいるところもあり石をよけては進む。川は濁流で水量は増していました。



沢靴や長靴に履き替え、装備を整えて8時5分に駐車地点を出発。林道跡を10分たどると登山口です。



撮影・鈴木貞信さん

橋の落ちたところから入渓。半分以上は沢歩きです。数日、雨が続いて水量は多く激流です。一番深いところをクリアするとだんだん斜度はゆるやかになりました。沢は大きな石が累々と続き、その中を沢水が勢いよく流れて圧巻でした。沢が次第に細くなり、9:50、源頭のお花畑で大休止としました。シナノキンバイ、チングルマの群落がきれい。そこから左に入り小さな沢を辿ると、今度はアオノツガザクラの群落でした。稜線から40分で頂上に。眺望はありませんでしたが日高の奥深さを十分に味わうことができました。

昼食後11時半に下山を開始。なんとか天気は持つかと思っていたらお花畑手前から大雨。慌てて雨具を着て、滑る岩に注意を払いながら駐車地点に13:50到着。雨脚が強くないうちに下山できホッとしました。

## 自然保護全国集会に参加して

6月12日（土）～13日（日）、日本山岳会主催、東京で開催の自然保護全国集会に参加してきました。

12日は各支部からの報告で私は「北海道の自然保護の現状」を話しました。シカの食害による植生の単純化を報告した京都支部など、各地で深刻な被害が起きている現状や、山のトイレ問題などが話題になりました。



屋久島に何度も通っている福岡支部の山本さんと

13日は上智大学を会場に「世界自然遺産を考える」をテーマに、屋久島プロジェクトのメンバーを中心に5人のパネリストによるディスカッションが行われました。

屋久島では1993年の世界自然遺産指定後、年間40万人が訪れ、多い日には1000人を超える観光客、登山者があふれ、登山道の破壊や、トイレ問題など、自然環境の悪化が大きな社会問題になっています。雨後の竹の子のようにガイドと称する人たちが増えましたが、質の低下が危惧されている現状も報告されました。このままでは、貴重な自然を失ってしまいます。ではどうしたらいいのか？結論は出ませんでした。地元の人たちの意向を尊重しながら、JACとしても自然を守るためにどうしたらいいのか地元の人たちと協力していこうと、引き続き考えて行くことになりました。長い自然保護運動があった知床や白神山地とは違う、一定のルールが出来ないままに、押し寄せた観光客に世界遺産が悲鳴をあげていると感じました。



撮影・富澤克禮さん

## トムラウシ山遭難事故を考えるシンポジウムに200人

7月11日、北海道山岳安全セミナーなどが主催して開催。180席のコンベンションセンター小ホールは200人を超える市民や登山者で満杯で、感心の深さがうかがわれました。

報告は3人から。「トムラウシ事故の総括的課題」について、青山千影氏（関西大学教授・日本山岳サーチアンドレスキュー研究機構代表）が事故の概要を説明しました。引率型登山の事故で、ガイド判断の意思決定プロセスを分析。抜本的な対策が打てないまま進行する限り、第2、第3の大型遭難事故が繰り返される可能性が高いと予想していると結びました。

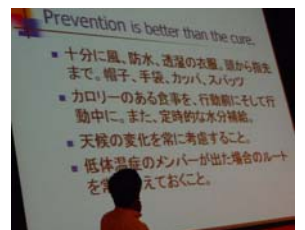
「低体温症の克服」について船木上総氏（苫小牧東病院副院長）が自分の体験も含めて話しました。シンポに先立ち、7月2日から4日まで、実際に旭岳からトムラウシを検証登山。実体験に基づいた低体温の報告は臨場感が伝わり、悪天候の時は、誰でも低体温症になりうるということが理解出来ました。

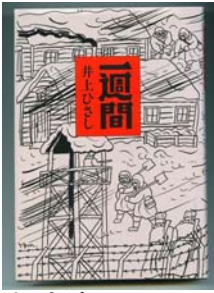
「ガイド・リーダーの課題」について、大橋政樹氏（マウンテン・クック大橋、山岳ガイド）はガイド登山とツアー登山の違いを明らかにしたうえで、リーダーの役割について、事故を起こさないためには余裕を持つ、テントを持つ、予備日を持つことが必要と述べました。

その後の質疑応答ではフロアーからツアー登山への疑問、低体温症への対策、ツアー業界への予備日保険の提案など、多様な意見、質問が出され、感心の深さと多様な問題点が明らかになりました。

私は前日に富良野岳に登りましたが、小雨降る中、40人の関西からのツアー客の装備に驚きました。大部分は雨具を着用していましたが、街で着るようなビニール合羽の人が何人かいました。スポーツタイツにスカートの人も。

船木上総氏が低体温症になる5つの原因をまとめていましたので、記します。1. 悪天候 2. ビバークで風雨にさらされた状態 3. 不十分な衣服、濡れた衣服 4. 疲労 5. 経験不足、トレーニング不足。ビバークせざるを得なくなった時、低体温症にならないで朝を迎えるにはどうしたらいいのか日頃から考えておくことが大事だと話されました。





## 一週間

井上ひさし著 新潮社 1900円+税

今年4月に亡くなった井上ひさしさんの最後の小説です。524ページもの長編を私も1週間かけて読み終わりました。

1946年、満州でソ連軍の捕虜になった小松修吉は、ハバロフスクの捕虜収容所に送られます。ロシア語に堪能であったために、収容所内で発行される日本語のソ連宣伝紙の編集部で、脱走防止のパンフレット作りを命じられます。

脱走に失敗した軍医、入江の手記をまとめさせ、脱走することがいかに辛く無意味なものか知らしめるためでした。

シベリア抑留はなぜ起きたのか、当時のソ連や日本軍とは何だったのかを問います。

長い月曜日には、シベリアの過酷な風土や、習慣、文学や歌。日本語を習得した赤軍将校たちの話す方言や、おかしみのある日本語など、人物像が実にたくみに表現されています。

文中には、日本人捕虜を国際法に違反して、強制労働を強いた旧・ソ連政府への告発の言葉が並びます。大規模な工事で労働力が必要になると収容所の兵士を利用したのです。これに乗ったのが旧・関東軍司令部でした。日本軍将校の自己防衛とエゴでどれだけたくさんの兵士が犠牲になったことか。大きなテーマでありながら、笑いも冒険活劇風に物語は展開します。まさに井上さんの真骨頂です。

ソ連・コムソモリスクの捕虜収容所で死去した哲学者の大橋吾郎は、同じ収容所にいた小松修吉に黒い手帳を託します。そこには日本軍将校への告発の言葉がありました。「兵士を凍死させるのは、決まって旧軍の軍隊制度をそっくりそのまま捕虜収容所に持ち込んだ部隊である。・・・各収容所においてソ連邦から配給された糧食のピンはね、横流しが横行していると聞く。なかにはピンはねした糧食で酒を作っている将校下士官たちもいるという。大日本帝国が批准したハーグ条約によれば、兵士は捕虜になった瞬間、ソ連邦政府の圏内に入り、旧軍の諸制度は適用されない。収容所に旧軍の諸制度を持ち込んだ将校下士官は国際法違反の罪に問わなければならない。」

物語は後半に入って、入江軍医の収容所を脱出してからの楽しい逃避行が語られ、少数民族の老人から「レーニンの手紙」を手に入れ、再び捕えられ、小松にその手紙が託されることから、ソ連軍との壮大な攻防が繰り広げられます。

少数民族の出身だったレーニンが、彼らのしあわせをいつも念頭において政治闘争を行う活動家になると誓うと記した手紙でした。しかし、レーニンはその後、ソ連社会主義の確立のために少数民族の利益を踏みにじっていくのです。重大な国家機密を守るためにソ連軍幹部はあらゆる手段で手紙を取り戻そうとします。

小松修吉の聡明さ、やさしさ、人間的な大きさにぐんぐん引き込まれました。一捕虜が命をかけて、ソ連軍幹部と繰り広げる胸のすく闘争に手に汗握ります。何としてもこの人には生き抜いて貰いたいと夢中になってページをめくりました。

主人公と、日本人女性とソ連人との間に生まれた娘との恋も描かれます。

日本人捕虜、小松修吉は北シベリアの収容所に移送されるので小説は終わります。たぶん、そこでもたくましく生き続けること予感させます。

小松修吉のたくまぬユーモアと、「貧乏物語」の河上肇に深く影響を受けた、不正や理不尽を決して許さない信念に圧倒されました。久しぶりに読んだ長編でしたが、スケールの大きな小説は期待以上で満足しました。

## 人は愛するに足り、真心は信ずるに足る アフガンとの約束

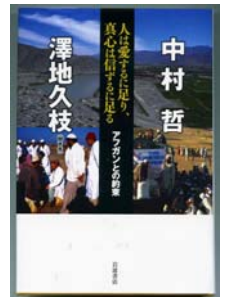
中村哲 澤地久枝（聞き手） 岩波書店 1900円+税

本書はアフガニスタンで医療活動続ける中村哲さんに、今までの活動や、その背景になった生い立ちや家族のことなどを、聞き手の澤地久枝さんが見事に引き出して、中村医師の人間像が浮かび上がってきます。

中村さんは医療のかたわら、アフガニスタンの人々が生きていける大地をよみがえらせようと、井戸を掘り用水路を造る活動を26年間続けてきました。

自身の家族のことは、語る事がなかった中村さん。父は労働運動にも参加されたこともあった人でした。若松市の市議員も務めました。父からは論語教育を受けたと語ります。叔父は、作家の火野葦平です。治安維持法で転向を余儀なくされましたが、困っている人の立場に立って考える生き方は、父や祖父叔父らから受け継いだようです。

誰もがやれることではないことを何故続けて来られたのか、その謎が本書では十二分に伝えています。



含蓄のある発言が多数あります。たとえば朝鮮人の強制連行については、大牟田に強制連行で何百人も何千人も連れて来られて、炭坑で一番労働条件の過酷なところに朝鮮人労働者が回され、数百人が死んでいる。自分の身は、針で刺されても飛び上がるけど、相手の体は槍で突いても平気だという感覚。これがなくならない限り駄目ですね。また精神科を選んだ理由については、高校から大学の初めの頃に、赤面恐怖症があって、人間の精神現象に興味を持ったのです。マドラッサについては、モスクを中心とした識字教育をするところをマドラッサといいマドラッサで学んでいる子供をタリバンというのです。アラビア語です。マドラッサで学ぶタリバンと、政治勢力としてのタリバンは違うのです。その区別も分からずに報道されていると。また国会で、自衛隊はいらないとはっきりとおっしゃったことも記憶に新しい。中村さんは語ります。自衛隊のアフガン介入の予測によって、日本人ボランティアの安全性は著しく脅かされるようになったと。そんな中で農業指導に力を尽くしていた、伊藤和也さんが殺されたのです。

中村さんは2002年12月、10歳だった息子を脳腫瘍で亡くしています。その悲しみに胸が詰まりました。最初の7年間、当時小さかった二人の子供と共にアフガニスタンで暮らした妻のおおらかさ。夫妻ともすごい人だなと思いました。

中村さんはあとがきで「人として最後まで守るべきものは何か、尊ぶべきものは何か、示唆するところがあれば幸いである」と結んでいます。思わず襟を正さずにはおれませんでした。

ペシャワール会 <http://ww1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>



## ganさんが遡行 北海道の沢登り 独断ガイドブック

岩村和彦著 共同文化社 2200円+税

やんちゃ坊主がそのまま大人になったようなganさんこと、岩村和彦さんが3冊目の沢のガイドブックを出版しました。自由な主として未組織山岳愛好家の集団、山メーリングリストでは軽妙なメールに読者多数の有名人？です。

平日は真面目なサラリーマンですが、土日は春から雪が降る少し前まで沢登りに明け暮れています。

私も何度か、初心者の方と同行させて頂きました。ganさんは沢やらずして山屋と言えるか〜？とコースの決まった尾根歩きはつまらないと言ってはばかりな人ですが、実際やってみると奥が深い。何せ体力、岩の技術、地図読み、高巻きがいいのか等、瞬時の判断が必要です。私はいまだに山屋になれない山好きというだけです。

ganさんが登った沢は500回を超える本物の沢屋。本書は道央・道南、日高、大雪山・十勝連峰、道東と4つの山域に分け42コースを紹介しています。初心者にはganさんが遡行したコースが地図で表示されていて親切。役に立ちます。「一度の遡行で生涯忘れないとは大袈裟か」ニタナイ川北面とか、「赤い岩盤に一度は誘惑されてみたいわ〜」三峯山沢ルートなど、インパクトのあるタイトルに惹きつけられます。迫力あるカラー写真と仲間の笑顔が素敵です。

ガイド本ながら、ganさんの軽妙で、リズムカルな文章は、前回の2冊にも劣らず健在。私も登ったソウベツ川ルートにはこんな表現がありました。「切り立った崖が左右に迫り、心臓の破裂しそうな鼓動が聞こえる。いきなり25mの大滝がその先に見えたら誰もが驚愕するだろう。滝は爆風を起こし・・・」その臨場感たっぷりの解説を読むだけで、「わ〜、どんなだろう」とワクワクします。

私もさっそく難易度、体力★ひとつ、面白さ★2つ以上に付箋をつけました。私の一番行きたい沢は三峰山沢コースと千走川南東面沢コースです。機会があったら同行お願いします。

夫が沢をやるなら基本の泳ぎを覚えてとしきりに言います。まずはそれをクリアーしてからですね。

友の会 樋口みな子 (江別市)  
W杯サッカーのパラグアイ日本戦。深夜でしたがハラハラしながらTVで応援しました。1勝も出来ないうという前評判でしたが、試合ごとに強くなっていく日本チームに勇気づけられました。シュートを決める本田選手も素敵ですが、中沢選手や闘莉王選手が粘り強く相手チームのボールを何度も止めて跳ね返す姿に感動しました。

跳ね返す姿に感動



# 映画

## やさしい嘘と贈り物

(アメリカ) ニック・ファクラー監督

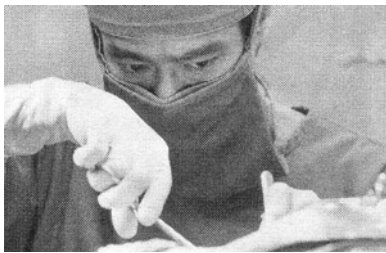
小さな町で一人暮らしをするロバート（マーティン・ランドロー）の生活は無味乾燥です。ある日、向いに越してきた美しい老婦人メアリー（エレン・バースティン）



からデートに誘われます。どんどん惹かれていくロバート。メアリーといると生きている喜びがわいてくるのです。その女性が妻だったら？

初めての恋のように胸ときめかせ、雪降る野外で頬寄せて踊るシーンの美しさ。ロバートは認知症で家族も過去のこともすっかり忘れてしまっていました。ずっと妻のメアリーや、息子や娘がそっと近くで見守っていたのです。メアリーはロバートに気づかれぬように、薬の管理をしていました。多分、現実はいかに美しくは進まないのだと思いますが、人を愛することで、表情まで変わってしまうのですね。メアリーがとてもチャーミング。

24歳の監督が高校生の時に脚本を書き、映画化したそうです。老人の日常を丁寧にとらえ見事です。老いをみつめる若い監督のみずみずしい感性に感動しました。やさしい嘘をつきとおす家族の温かさに涙があふれました。



## 孤高のメス

(日本) 成島出 監督

医師である大鐘稔彦の同名ベストセラー小説の映画化です。大学病院中心の医療体制に反旗を翻し、地方の市民病院に赴任してきた外科医当麻鉄彦（堤真一）が目の前の患者を救うことにひたむきに取り組む中で、看護師や新人医師、周りの人々を変えて行き、困難を乗り越えていく姿を描きます。

学閥に支配される地方の病院、財政が厳しく不十分な医療機器、医療ミスを手帳で隠す悪徳医師など医療に関わるさまざまな問題が描かれます。冒頭から見せてくれた手術シーンが圧巻。命と向き合い、最善を尽くす、ムダのないメスさばきは美しく、看護師の中村浪子（夏川結衣）は仕事への誇りを取り戻していくのです。

市長が倒れ、脳死した青年から生体肝移植まで行います。そのことの是非を問う映画ではありません。患者の立場に立って、医療を行うことの大切さ、命の大切さを見つめます。当麻医師を支えるスタッフもしっかりと応えて行きます。こんなカッコいい医師はいないけど、ひたむきに患者と向き合い、いい医療を目指していた私のかつての仲間たちを思い出しました。まだまだ、捨てたもんじゃないと勇気が湧いてきました。

## 春との旅

(日本) 小林政広監督

19歳の春（徳永えり）は「東京に出て仕事を探す」と言い出し、その一言に、春がいないと暮らせない74歳の忠男（仲代達矢）は激怒。引き留める春を振り切り、家を出てしまいます。行く先は、今は疎遠となっている姉兄弟の家。頼れる家があれば、そのまま居候させてもらおう魂胆です。だが春は、足の不自由な忠男を1人で行かせるわけにもいかず慌てて祖父を追いかけることに。かくして忠男と春との2人



旅が始まっていきます。増毛から新冠まで。物語は、そんな2人と姉兄弟との再会シーンを中心に展開します。忠男には、兄の重男、姉の茂子、弟の行男と、もう1人の弟・道男という姉兄弟がいる。最初に訪れるのは大滝秀治と菅井きん扮する兄夫婦です。姉兄弟のなかでも、もっとも反りが合わなかったと春に明かす忠男だが、兄がもらす言葉にふいを突かれます。姉、弟、それぞれに事情を抱えていました。介護、医療、不況による失業等。忠男は兄弟を訪ねて、社会の厳しさを思い知らされるのです。春との旅を通してこの映画は生きることの難しさと素晴らしさをスクリーンに映し出していきます。

春が祖父につきあって、兄弟との葛藤を見ていううちに、頼りなかった少女が自立して行きます。わがままな忠男が、春との絆を深めていきます。兄弟とは疎遠になってはいても、会えば肉親の情は深く互いを思いやる優しさがじわりと私を包んでくれました。

独居老人が増え、親戚すらいない高齢者も増えています。地域全体で高齢者を見守ってくれるシステムがあったら、安心して暮らせるのに。この映画を観ていたら、しきりに父のことが気になり、翌日、病院に行ってみました。歩けないのに、トイレに行こうとして転倒。その夜は不穏だったとか。虫が知らせるって本当ですね。身につまされる映画でした。

